




平成29年度水稻生育診断予測事業速報No.3 (早植栽培6月22日調査結果)

平成29年6月26日
栃木県農政部経営技術課

 **出穂は平年より4日程度早まる見込。**
 **今後は間断かん水を継続する。**
 **イネ縞葉枯病の防除を徹底する。**

1 気象概況<<6月上旬～中旬(宇都宮)>>

6月上旬～中旬の平均気温は上旬が平年より0.1℃高く、中旬は1.0℃低い。4～5月は高温で推移したが、6月に入り平年並からやや低い状況となっている。降水量は、6月上旬が平年比48%、中旬が45%で移植以降突発的な降雨はあるものの、6月としては平年より少ない。日照時間は、6月上旬が平年比133%、中旬は151%と、4月中旬以降多照傾向が継続している。関東甲信地方の梅雨入りは6月7日頃で、平年より1日早く、昨年より2日遅かった。(【参考】梅雨明け：平年7月21日頃、昨年：7月29日頃)

2 調査結果<<早植栽培、品種：コシヒカリ>>

(1) 全体の生育(16か所平均)(表1、図1～2)

草丈はやや短く(平年比95%)、茎数はやや多く(103%)、葉齢は0.1多く、葉色は0.5淡い。地域によりバラツキがあるが葉齢から判断して、生育は平年並から1日程度進んでいると考えられる。生育診断値(葉色×茎数)は平年比92%と小さい。

(2) 分施肥系の生育(10か所平均)(表1、図1～2)

ア 草丈は48.8cmで平年比94%と短く、茎数は575本/m²で平年並である。

イ 葉齢は10.0葉で平年より0.1葉多く、葉齢から判断すると生育は平年並から1日程度進んでいると考えられる。

ウ 葉色は4.1で平年より0.4淡い。

エ 葉色×茎数値は2,368で平年より小さい(平年比93%)。

オ イネドロオイムシが5か所で確認されているが、発生程度は低い。

(3) 全量基肥系の生育(6か所平均)(表1、図1～2)

ア 草丈は51.1cmで平年比96%とやや短く、茎数は580本/m²で平年比108%と多い。

イ 葉齢は10.3で平年より0.2葉多く、葉齢から判断すると生育は1日程度進んでいると考えられる。

ウ 葉色は3.6で平年より0.7淡い。

エ 葉色×茎数値は2,113で平年より少ない(平年比91%)。

オ イネドロオイムシが3か所で確認されているが、発生程度は低い。

3 出穂期予測

(1) 幼穂分化期（農業試験場（宇都宮市）、6月22日現在）（表2）

- ア 「初星」は6月21日で平年並。「なすひかり」は6月20日で平年より4日早い。
 イ 「コシヒカリ」及び「とちぎの星」の幼穂分化は確認されていない。

表2 水稻品種の幼穂分化期(6月23日現在、農業試験場)

	初 星	なすひかり	コシヒカリ	とちぎの星
本 年	6月21日	6月20日	未確認	未確認
平 年	6月21日	6月24日	6月29日	7月1日

(2) 6月22日現在の出穂期予測（表3、図3-1~2）

移植（5月4日）～6月21日までの積算平均気温は、宇都宮市では960.5℃と平年より62.3℃高く、大田原市では894.9℃と平年より44.3℃高かった。

今後、平均気温が平年並で経過した場合、平均気温から算出した生育ステージ（DVS値）による早植コシヒカリ（5月4日移植）の出穂期は表3のとおりである。これによると、宇都宮市、大田原市とも平年より4日程度早いと推定される。

表3 DVSによる出穂期予測(6月22日現在、早植コシヒカリ(5月4日移植))

	今後の平均気温（平年との比較）		
	1.5℃高く経過	平年並	1.5℃低く経過
宇都宮市	7月27日～28日	7月29日～30日	8月2日～3日
大田原市	7月31日～8月1日	8月3日～4日	8月7日～8日

4 技術対策

(1) 水管理

目標とする茎数はほぼ確保されている。生育診断値が平年より小さいので、強い中干しは行わず、追肥までは間断かん水を継続して葉色を維持する。また、移植から湛水状態を継続しているほ場では、早急に間断かん水を実施する。ただし、施肥体系、地域により生育にバラツキがあるため、生育診断値が指標値を上回っている場合は、今後の天候を加味すると、中干しを実施して診断値を適正範囲内に収めることが必要と考えられる。

気象庁地球環境・海洋部発表平成29年6月22日発表の「関東甲信地方 1か月予報」（6月24日～7月23日の天候見通し）では、“平年に比べ曇りや雨の日が多い”とあり、向こう1か月の平均気温は平年並の確率が50%、低い確率が30%と予想されている。今後の冷害の可能性は低いと考えられるが、低温になった場合に深水管理ができるよう、畦畔の漏水チェック等、今のうちから準備を進めておくことも重要である。

なお、渡良瀬川では6月23日から10%の取水制限が実施されている。早植栽培で

は、分けつ盛期～最高分けつ期になっており、必要とする水量は少ない。用水管理者や地域で協議し、水系毎に番水方式の実施や普通植の活着期のほ場を優先的にかん水するなど、効率的な利水に努める。

(2) 加里の追肥

加里は、デンプンの生成、同化産物の移行、根の活性化に重要な働きをする。茎葉中に加里が多いと、稈の強度が高まり倒伏を少なくする効果が期待できる。特に、分けつ盛期以降は加里濃度が低くなるので、出穂前 40～45 日頃に積極的に加里（成分で 4～5 kg/10a）を追肥する。

なお、葉色が淡くても窒素成分による「つなぎ肥」は基本的に施用しない。

(3) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

農業環境指導センター発表（平成 29 年 6 月 16 日）の「平成 29 年度 病害虫発生予報第 3 号」によると、イネ縞葉枯病の発生量が「やや多い」と予想されている。発生が多い地域では、ウイルスを媒介するヒメトビウンカに対して有効な剤を使用し、地域ぐるみで防除（箱施用剤の使用＋本田での薬剤散布）を実施する。

イ いもち病（葉いもち）

農業環境指導センター発表（平成 29 年 6 月 16 日）の「平成 29 年度 病害虫発生予報第 3 報」によると、葉いもちの発生予想は「やや少」である。BLASTAM（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/data/Blastam/2017.htm>）による葉いもち感染好適条件判定結果では、6 月に入って感染好適条件及び準感染好適条件が出現し始めている。常発地域や箱施用剤を使用していない地域では、ほ場を良く見回り、早期発見・早期防除に努める。なお、いもち病の防除は、発生前の予防剤（粒剤）施用が効果的である。また、いもち病の発生源となる取置き苗は早急に処分する。

ウ 斑点米カメムシ類

農業環境指導センター発表（平成 29 年 6 月 26 日）の「植物防疫ニュース（速報 No.3）」によると、斑点米カメムシ類全体の発生概評は「やや少」であるが、気温の上昇と共に水田への飛来や、その後の発生量が急増する可能性があるとして予想されており、斑点米の多発を招くおそれがある。

本田内の除草及び水田周辺の草刈り（水稻の出穂 2～3 週間前と出穂期頃の 2 回）を行ってカメムシ類の発生しにくい環境を整えるとともに、出穂期以降に斑点米カメムシ類が水田内に確認できる場合は薬剤防除を行う。

エ ニカメイチュウ

心枯茎が目立つ場合には、第 2 世代幼虫の防除が必要である。6 月下旬に、ほ場当たり任意の 25 株を見取り調査して、葉鞘変色茎の発生株率が 20% 以上の場合は、防除を行う。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）



気象災害による農業被害を未然に防ぐため、
技術対策情報が携帯電話等に直接メール配信される
「とちぎ農業防災メール」のご登録をお願いします！

併せて、気象警報・注意報等が直接メール配信される
「栃木県防災メール」のご登録をお願いします！



↑「とちぎ農業防災メール」
登録はコチラから



↑「栃木県防災メール」
仮登録はコチラから